

代理コードの作り方(音のシンメトリー)-03.doc

氏名:

クラス:

★代理コードの作り方—その壱(中心軸システム axis system)

そーやって、どこまでも増殖を続ける代理コード。なんやが、『無数の代理コードを全部覚えろ』つーのは、ま、無意味なハナシで、どっちらつーと、『だったら作り方を覚えりゃいいっちゃん』つてこと。なるわけ。

で、

スケールの3度堆積がコード。なんだけど

そもそのすべてはメジャースケールの I・IV・V しか無い。つてこと

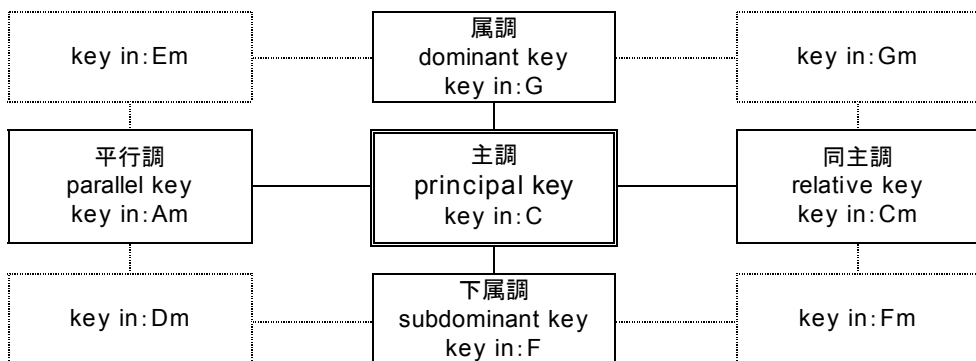
e.g. Key in C だったら、使えるコードは C・F・G の三つだけね。それしか無い

あとは、近親調からの借用と代理つてことなのよ。それを理解するカギは、これ

「制作実習」—復習問題(12).doc

★Blues の発生②(近親調 related keys と Diminished 7th Chords)

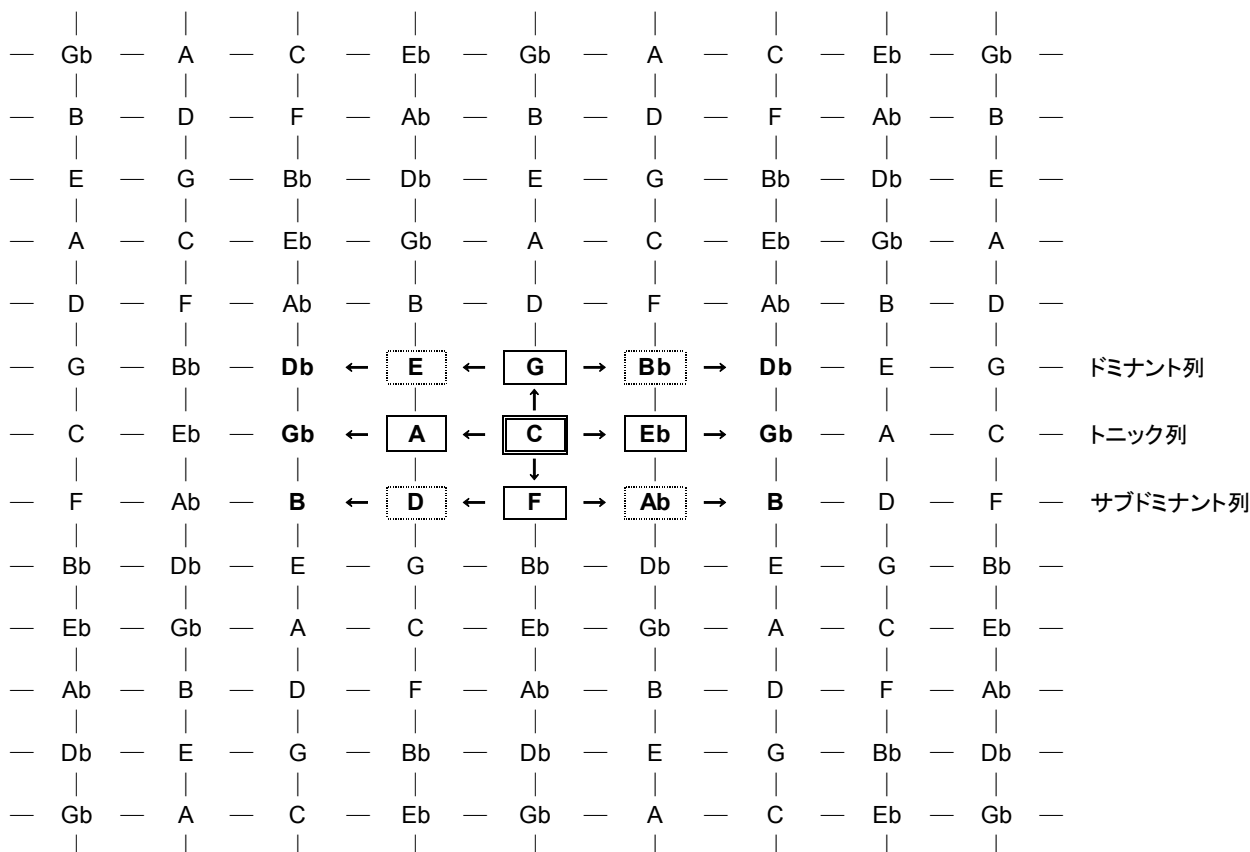
にて示した、あの恐ろしい図。



で、

この“リラティブ”と“パラレル”の関係だけがメチャ大事だ！！

これらを組合わせてくと、、、



これね。

この転調の仕組みのドミナント列・トニック列・サブドミナント列が、そのまま代理コードの仕組みになるつてことだ。

それぞれの近親調における

「平行調 parallel key の関係が=代理コード substitution chords」

で、「同主調 relative key の関係が=借用コード modal interchange」

ってことなんで、

それを結びつけてけば、代理コードとファンクション、その元になってるコードスケール、それら全てを導けるってこと。

代理コードの仕組み

in C:	借用	代理	←	借用	代理	←	原型	借用	→	代理	借用	→	代理	借用
in Cm:	借用	代理	←	借用	代理	←	借用	原型	→	代理	借用	→	代理	借用
D	C#7	C#m7	←	E7	Em7	←	G7	Gm7	→	B ^b 7	B ^b m7	→	D ^b 7	D ^b m7
	↑	↑		↑	↑		↑	↑		↑	↑		↑	↑
T	F#M7	F#m7	←	AM7	Am7	←	CM7	Cm7	→	E ^b M7	E ^b m7	→	G ^b M7	G ^b m7
	↓	↓		↓	↓		↓	↓		↓	↓		↓	↓
S	BM7	Bm7	←	DM7	Dm7	←	FM7	Fm7	→	A ^b M7	A ^b m7	→	C ^b M7	C ^b m7
	key in F#m / A				key in Am / C				key in Cm / E ^b				key in E ^b m / G ^b	

(縦矢印はそれぞれの属和音・下屬和音を表し、お隣同士は同主調、横矢印は平行調を表す)

※ちなみに、III_{m7}や^bVI_{M7}のトニック解釈は、代理や借用ぢやなくて「置換和音」っつー別物なんで不採用

これをみれば、メジャー・ダイアトニックの[II_{m7}・III_{m7}・VI_{m7}]が、それぞれ[S・D・T]の代理だった理由

マイナー・ダイアトニックの[^bIII_{M7}・^bVI_{M7}・^bVII₇]が、それぞれ[T・S・D]の代理だった理由

がハッキリする。

だから、たとえば in C:における裏コードのことを正確にゆーと

表の右回り⇒「G7の借用の代理の借用の代理コード」⇒Db7

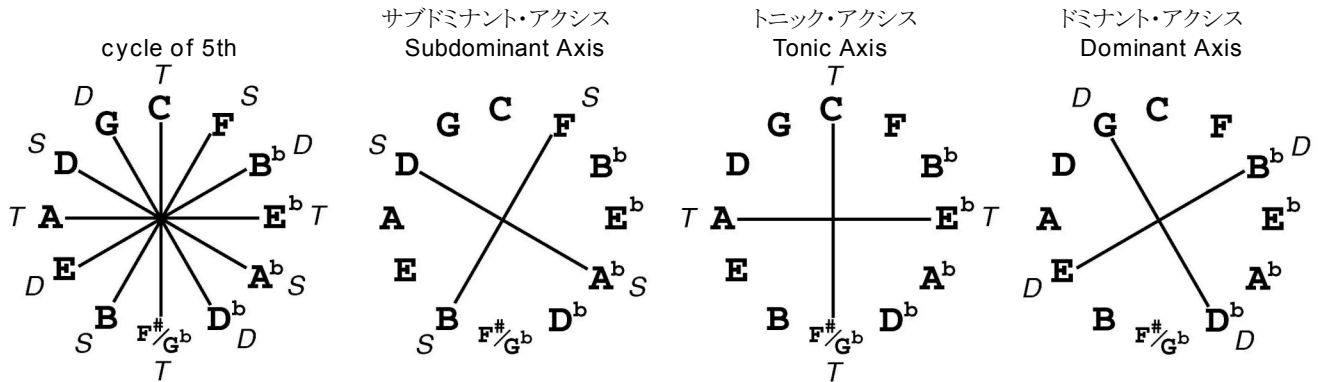
ってことで、表の左回り⇒「G7の代理の借用の代理の借用コード」⇒C#7

ってことだ。

てことは、

裏コードはドミナントだけぢやなくて、トニックやサブドミナントにもある。ってこと、。さらには裏だけぢやなく90度もある。

それが、中心軸システム axis system (by Bartok, Lendvai Erno)



よーするに、

ほんとの意味で、明確な機能を持つコードってのは I・IV・Vの3度堆積しか無い。で、

cycle of 5th の90度は平行調の関係だから、T・D・Sを3回まわせば12音使って元に戻る。

だから、I・IV・V以外のダイアトニックコードは、なんらかの代理と解釈できる。

ってことだな。

その理屈は音律の歴史からも明らかだ。ってことを軽く、

そもその西洋音律は、オクターブ以外にゃ P5th(とその転回形 P4th)のことしか考えてなかったんだから。で、それから5度の和声的分割である M3rd と m3rd で、純正追求は打ち切りにした。もんで、I・IV・Vの3度堆積三和音しかないのはアタリマエのことなのよ。

ま

これで、

Major Diatonic Chords の II・III・VI と、Minor Diatonic Chords の ^bIII・^bVI・^bVII のファンクションはハッキリした。けど、それぢや、残りモンになったメジャーの VII、マイナーの II、よーするにハーフディミニッシュ・コードってのはなんなんだ？

って、ことだが。

★代理コードの作り方ーその貳(□_{m7}^(b5)コードのファンクション)

まず、前提となるのは、

それぞれ7つのダイアトニックコードの内、[メジャーダイアトニックコードのVII]と[マイナーダイアトニックコードのII]、それだけが代理コードの仕組みに登場しないってこと。

	Fm7	FM7	Dm7	DM7	Bm7	BM7
MajorのVII⇒		IVM7	→ 平行調のIV	→ 同主調のIV	→ 平行調のIV	→ 同主調のIV
MinorのII⇒	IVm7	→ 同主調のIV	→ 平行調のIV	→ 同主調のIV		
	in_Cm	in_C	in_Am	in_A	in_F#m	in_F#

サブドミナント・アクシス Subdominant Axis 左回りによって登場するのはそれぞれ

サブドミナント機能を持つメジャーkeyの代理VIIコード ⇒ VII_{m7} or VII_{M7}

サブドミナント機能を持つマイナーkeyの代理IIコード ⇒ II_{m7} or II_{M7}

ってこと、だから結果

ハーフディミニッシュは独立した意味(サブドミナント機能)を持たない。ってことになる。

つっても、実際問題

ダイアトニックの中にハーフディミニッシュはあるんだから、なんらかの方法で Function を割り当てんとあまりに不憫だ。

そこで、2つの考え方が出てきた。

◆ハーフディミニッシュの Function-①

ハーフディミニッシュを『I・IV・Vのどれかの変形だ省略形』だっつー解釈で機能をアテハメると・・・

	⇒		⇒				⇒		⇒		⇒	
in C: V ₇		V ₇ (omit1)		VII _{m7} (b5)		in Cm: V _{m7}		V ₇ ofbIII		bVII ₇ (omit1)		II _{m7} (b5)
D		D		D		D		D		D		D

これにて、ハーフディミニッシュは

Major Key の VII_{m7}(b5) ⇒ V₇ の Root 抜きだから ⇒ **ドミナント**

Minor Key の II_{m7}(b5) ⇒ V_{m7} の平行調代理 bVII₇ の Root 抜きだから ⇒ **ドミナント**

となる。

◆ハーフディミニッシュの Function-②

axis system は、コードタイプ以前に『Root が持つ機能』を表すっつー解釈だと、これが基本。

I	^b II	II	^b III	III	IV	[#] IV	V	^b VI	VI	^b VII	VII
	D		T	D		T	D		T	D	
T		S			S			S		T	S

この基本に戻れば、

in C: I		in Cm: I
T		T
II		II
S		S
III		^b III
D		T
IV		IV
S		S
V		V
D		D
VI		^b VI
T		S
VII		^b VII
S		D
VII _{m7} (b5)		II _{m7} (b5)
S		S

これにて、ハーフディミニッシュは

Major Key の VII_{m7}(b5) ⇒ Root が VII のダイアトニックコードだから ⇒ **サブドミナント**

Minor Key の II_{m7}(b5) ⇒ Root が II のダイアトニックコードだから ⇒ **サブドミナント**

となる。

でもって、メジャー・ダイアトニックの [VII_{m7}^(b5)] が、[D] と [S] 両方の代理だった理由

マイナー・ダイアトニックの [II_{m7}^(b5)] が、[S] と [D] 両方の代理だった理由がハッキリした。

★代理コードの作り方ーその参(コードタイプの拡張法)

つつも、ハーフディミニッシュの解釈が2つあるものなんなんで、

以後、『◆ハーフディミニッシュの Function - ②』=ハーフディミニッシュはサブドミナントを採用する。
 なんでかつつと、そのほーが、すべて自由闊達になれるのだ。

その、自由への起点は、これ。4つのスケールからでてくる I・IV・V を中心軸システム axis system に沿って回転させると

	I	^b II	II	^b III	III	IV	[#] IV	V	^b VI	VI	^b VII	VII
	T	D	S	T	D	S	T	D	S	T	D	S
Major	I _{M7}	V ₇	IV _{M7}	I _{M7}	V ₇	IV _{M7}	I _{M7}	V ₇	IV _{M7}	I _{M7}	V ₇	IV _{M7}
Melo_	I _{mM7}	V ₇	IV ₇	I _{mM7}	V ₇	IV ₇	I _{mM7}	V ₇	IV ₇	I _{mM7}	V ₇	IV ₇
Harm_	I _{mM7}	V ₇	IV _{m7}	I _{mM7}	V ₇	IV _{m7}	I _{mM7}	V ₇	IV _{m7}	I _{mM7}	V ₇	IV _{m7}
Natur_	I _{m7}	V _{m7}	IV _{m7}	I _{m7}	V _{m7}	IV _{m7}	I _{m7}	V _{m7}	IV _{m7}	I _{m7}	V _{m7}	IV _{m7}
axis	T	180度	左90度	右90度	左90度	S	180度	D	右90度	左90度	右90度	180度

こーなる。

ファンクションを明確に保ったまま、いつでも90度(上下 m3rd)や180度(tritone)へ、移動・交換可能できるってことを示してるこの表は、メチャメチャ重要だ。

3度堆積で構成される[コードタイプ×8種類]のうち

□aug	□augM7	□M7	□7	□mM7	□m7	□m7(b5)	□dim7
M3rd	m3rd	M3rd	m3rd	M3rd	m3rd	M3rd	m3rd
M3rd	M3rd	m3rd	m3rd	M3rd	M3rd	m3rd	m3rd
M3rd	M3rd	M3rd	M3rd	m3rd	m3rd	m3rd	m3rd

上記まんなかの Root の上に P5th を持つ4種類だけが、明確なファンクションを持つ。ってことだから、この最も基本的な4つのコードタイプだけで、12音上のすべてに明確なファンクションを持つ代理コードを作れるっつーわけだ。

で、

あとは拡大解釈と応用

I・IV・V 以外のダイアトニックコードを中心軸システム axis system に沿って回転させると。

	I	^b II	II	^b III	III	IV	[#] IV	V	^b VI	VI	^b VII	VII
	T	D	S	T	D	S	T	D	S	T	D	S
Major	VI _{m7}	III _{m7}	II _{m7} VII ^φ	VI _{m7}	III _{m7}	II _{m7} VII ^φ	VI _{m7}	III _{m7}	II _{m7} VII ^φ	VI _{m7}	III _{m7}	VII ^φ II _{m7}
Melo_	^b III _{augM7} VI ^φ		II _{m7} VII ^φ	^b III _{augM7} VI ^φ		II _{m7} VII ^φ	^b III _{augM7} VI ^φ		II _{m7} VII ^φ	VI ^φ ^b III _{augM7}		VII ^φ II _{m7}
Harm_	^b III _{augM7}		II ^φ ^b VI _{M7} VII _{dim7}	^b III _{augM7}		II ^φ ^b VI _{M7} VII _{dim7}	^b III _{augM7}		^b VI _{M7} II ^φ VII _{dim7}	^b III _{augM7}		VII _{dim7} II ^φ ^b VI _{M7}
Natur_	^b III _{M7}	^b VII ₇	II ^φ ^b VI _{M7}	^b III _{M7}	^b VII ₇	II ^φ ^b VI _{M7}	^b III _{M7}	^b VII ₇	^b VI _{M7} II ^φ	^b III _{M7}	^b VII ₇	II ^φ ^b VI _{M7}

こんなかんぢで、I・IV・V 以外のダイアトニックコードも、ある程度ファンクションを保ったまま自由になれる。

だから、

マザースケールの設定によっては、こんなのもアリ得る。

	I	^b II	II	^b III	III	IV	[#] IV	V	^b VI	VI	^b VII	VII
	T	D	S	T	D	S	T	D	S	T	D	S
dor.	I _{m7}	V _{m7}	IV ₇	I _{m7}	V _{m7}	IV ₇	I _{m7}	V _{m7}	IV ₇	I _{m7}	V _{m7}	IV ₇
phr.	I _{m7}	V ^φ	IV _{m7}	I _{m7}	V ^φ	IV _{m7}	I _{m7}	V ^φ	IV _{m7}	I _{m7}	V ^φ	IV _{m7}
lyd.	I _{M7}	V _{M7}		I _{M7}	V _{M7}		I _{M7}	V _{M7}		I _{M7}	V _{M7}	
mix.	I ₇	V _{m7}	IV _{M7}	I ₇	V _{m7}	IV _{M7}	I ₇	V _{m7}	IV _{M7}	I ₇	V _{m7}	IV _{M7}
axis	T	180度	左90度	右90度	左90度	S	180度	D	右90度	左90度	右90度	180度

まだまだアリ得る。

ん〜、便利だー。

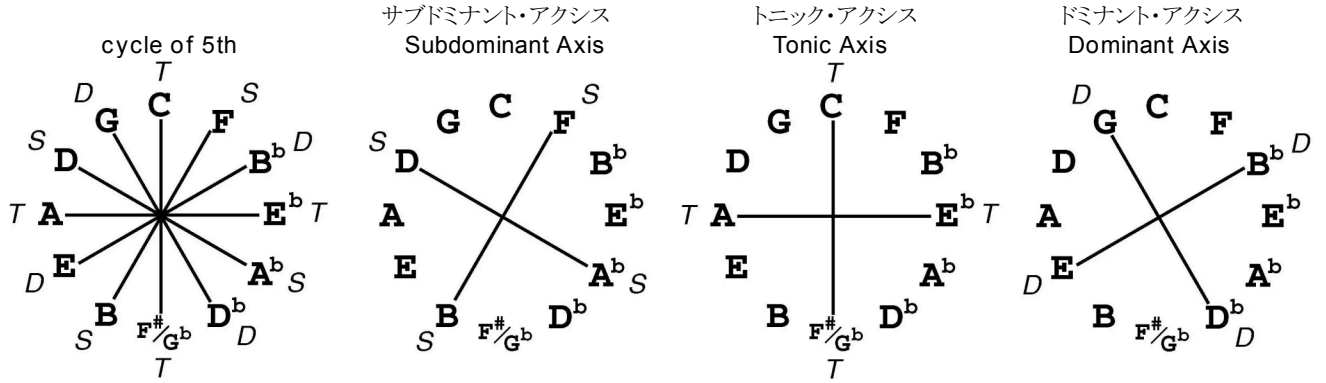
★代理コードの作り方ーその四(脱線:アクシス鏡像)

そもそも、コードル=調性ってのが成り立つには、トニック=中心音=トータル・センターが明確だっつー前提がなきゃならん。

そのトータル・センター= I の上にペアレントスケールに沿った3度を乗っけると、トニック・コードが出来上がり、IV・Vの上にはそれぞれサブドミナント・コードとドミナント・コードが出来上がるわけで、その3つの機能がオンガクをトータル・センターからの距離感操作によってまとめた結果、統一感を醸し世界平和に繋がったわけだ。が、

冒頭で示したアクシスシステムは、トータル・センターに因る明確な機能 Function を持ったコードを使いながら、各種スケールの key を自由に横断できること示した。

中心軸システム axis system



これを使えば、コードルでありながらも、コードを意識することなく曲を進行させることが可能になる。その典型例がアクシス鏡像だ。

axis system を時計に見たてりゃ、

トニックから針が10分進む(M2nd 下降)とドミナントになる。し

トニックから針が20分戻って(M3rd 上行)もドミナントになる。

ってことは、

インターバルを保ったまま和音を平行移動させると

上行	Root	m2nd	M2nd	m3rd	M3rd	P4th	+4th	P5th	m6th	M6th	m7th	M7tn	P8th	下行
	D	S	T	D	S	T	D	S	T	D	S	T	D	
	T	D	S	T	D	S	T	D	S	T	D	S	T	
	S	T	D	S	T	D	S	T	D	S	T	D	S	
	P8th	M7th	m7th	M6th	m6th	P5th	+4th	P4th	M3rd	m3rd	M2nd	m2nd	Root	

Function もこんなふうに平行移動する。

よーするに、トニックから半音上がればドミナントで、半音下がればサブドミナントってこと。

ってことは、

上声部・下声部それぞれのインターバルを保ったまま、逆方向に上行・下行すると

中心軸システム axis system を左に30度ずつ回していく関係→

	T	D	S	T	D	S	T	D	S	T	D	S	T	
上行	P1st	m2nd	M2nd	m3rd	M3rd	P4th	+4th	P5th	m6th	M6th	m7th	M7tn	P8th	
	m3rd	M3rd	P4th	+4th	P5th	m6th	M6th	m7th	M7tn	P8th	m2nd	M2nd	m3rd	
	+4th	P5th	m6th	M6th	m7th	M7tn	P8th	m2nd	M2nd	m3rd	M3rd	P4th	+4th	
	M6th	m7th	M7th	P8th	m2nd	M2nd	m3rd	M3rd	P4th	+4th	P5th	m6th	M6th	
下行	m3rd	M2nd	m2nd	P1st	M7th	m7th	M6th	m6th	P5th	+4th	P4th	M3rd	m3rd	
	+4th	P4th	M3rd	m3rd	M2nd	m2nd	P1st	M7th	m7th	M6th	m6th	P5th	+4th	
	M6th	m6th	P5th	+4th	P4th	M3rd	m3rd	M2nd	m2nd	P1st	M7th	m7th	M6th	
	P8th	M7th	m7th	M6th	m6th	P5th	+4th	P4th	M3rd	m3rd	M2nd	m2nd	P1st	
	T	D	S	T	D	S	T	D	S	T	D	S	T	

←中心軸システム axis system を右に30度ずつ回していく関係

ちよいとややこーしが、まんなかの三列だけ見ときゃあとは同じ。

この縦関係が同じコードタイプで、尚且つ同じファンクションを持つ Root を示してる。

これって和音としての dim7th の機能とはなんら一切関係ないんだけど、じっくり見ると、上行形と下行形で、dim7th コードの構成音4音が、反行しながら2つおきに合体してるってことがよくわかる。

で、それつかって
 実際やってみると、例えばこんなかんちになったりする。

なんだか〜かもしらが、だからって、モーダルでも無調でもない。カデンツ原則を守り抜いたコード曲なのだ。
 コーダルとはいえ、
 なんのコードだ？って、いわれても「最初はC⁹/Gからはじまって〜最後も」とか、いえなくもないけど、重要なのは、
 コーダルなのにコードなんて感ヶー無い。ってこと

作りかたはこんなかんち。

- ①まず、最初にトニックとなる上声部・下声部を決定する。
- ②ファンクションに沿ってそれぞれの声部を平行移動する。(移動距離の関係は前頁で示した通り) それだけ。

で、この、上声部が上がったら、ファンクションを合わせて下声部は下がる。上声部が下がったら、〜下声部は上がる。
 ってな、
 中心軸システム axis system を使った、この反行関係のコンビネーションのことを『アクシス鏡像』っつー。

音符をいっくずつ見てくと、これは明らかに代理コードの仕組みとは別物だ。けど、インターバルを保った平行移動ってことは、音色自体が動いてるってことだから、上声部・下声部の塊単位で代理コードの仕組みに合致させてるってことね。しかも、“鏡像形＝反行形(コントラリーモーション contrary motion)” だっるのが泣かせる。。。

★代理コードの作り方ーその五(ざっとまとめると)

ここまですらっとまとめると、
 こんなかんち。

	Major	Melo_	Harm_	Natur_	Major	Melo_	Harm_	Natur_	dor.	phr.	lyd.	harm maj.
VII S	VII ^φ	∥	VII ^{dim7}		IV _{M7}	IV ₇	IV _{m7}	∥				VII _{m7}
^b VII D				^b VII ₇	V ₇	∥	∥	V _{m7}	^b VII _{M7}			
VI T	VI _{m7}	VI ^φ			I _{M7}	I _{mM7}	∥	I _{m7}				
^b VI S			^b VI _{M7}	∥	IV _{M7}	IV ₇	IV _{m7}	∥				
V D	V ₇	∥	∥	V _{m7}								
[#] IV T					I _{M7}	I _{mM7}	∥	I _{m7}			[#] IV ^φ	
IV S	IV _{M7}	IV ₇	IV _{m7}	∥								IV _{mM7}
III D	III _{m7}				V ₇	∥	∥	V _{m7}				
^b III T		^b III _{M7} ⁺⁵	∥	^b III _{M7}	I _{M7}	I _{mM7}	∥	I _{m7}				
II S	II _{m7}	∥	II ^φ	∥	IV _{M7}	IV ₇	IV _{m7}	∥			II ₇	
^b II D					V ₇	∥	∥	V _{m7}			^b II _{M7}	
I T	I _{M7}	I _{mM7}	∥	I _{m7}								

これで概ね主要な代理コードは出揃った。

しかも、ペアレントスケールとファンクションがハッキリしてるってことは、いつでも交換可能だっってこと。

しかも、I・IV・Vからの距離がハッキリしてるってことは、トニックとの絶対位置関係を意識した連結が可能だっってこと。

この真ん中の axis system は、[等間隔のインターバル(旋律的欲求)]と[溶け合うインターバル(和声的欲求)]の矛盾を12等分平均律においてイッキに解決する唯一のメソッドだ。

ここからアルファ和音とかに繋がってわけど、とついそぎ先人に感謝